



^13  
3938  
2





13  
3938  
巻

申  
上

冊  
八  
先  
號  
函

甘高  
牛  
包  
牛  
牛  
牛

牛  
牛  
牛  
牛  
牛  
牛

額  
三  
金  
五  
郎

假名文章娘節用前編中

江戸

曲山人補綴

第二回

在茲後みお龜の合の舞の後念へさうりし後いふを

いまがとてさうく浮きまきまの今日や後のあつた

あまやき強中んうとあまやきと指さうかぞ

うらやまらうあもあまやきあまやきあまやきあまやき

あまやきあまやきあまやきあまやきあまやきあまやき

あまやきあまやきあまやきあまやきあまやきあまやき











ま—その日よりのうらうらと暮る東の空のころち縁め。  
根を流まぬるとまひまのりの月お級まや夜の中  
とくろまはたけの淵川をど身を洗めんとうつこのつらふ  
ひけるがよその入水やうらうらんと猶人を出—水邊を流  
るるねまけけまごその死骸ままこれが今の文と書  
由定業るまんとやうや—あま—め家出せ—日と長月と  
ま七目—の坊ひまむひおねんごうお涙まらふらと  
まのつてまぬらまのつらうく快おま—めと様々の今  
神—入人—しておまらう。まはつて又今—の神の神の叙  
又文は神の神お養子おのりまらうけが。まらひまらお  
まら—のて容顔のうら—根のあつお終るま—が今—に  
給方ま—又の教へまらがひて養父母お孝まほけう。まら  
うら—お好まのま—。あま—のひのまらおかりまら女ま病  
まら—のまらまらまらまらまら—のまらまらまら  
んとまら—まらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

無言無語



















神の強へ神の弱のありけりよ<sup>目八</sup>神のまろく

あつち生まう。ヤのあつちとぬるまをアガる。己こんみ不

報と行てくくいつて也。是也女もア勝るも又男がまよ

かひをかひかひとて也。あつちの顔をかア一とくあつち顔

おやまよらぬ女ふやあつちと一とくあつちの目も物

くくく<sup>目八</sup>今日の日まよ不問はく又一か二歩く

えん理の報も毎へ後へ田史野人と強りあつちと一か二歩

田史野人あつち。是の年房あつちと一とくあつちの目も物

えんとあつちあつちの子あつちと一とくあつちの目も物

一とくあつちあつちの目も物。あつちの目も物。あつちの目も物

且つあつちあつちの目も物。あつちの目も物。あつちの目も物

屋のかくのあつち。あつちの目も物。あつちの目も物

美名雀とあつち。あつちの目も物。あつちの目も物

天人の将衣とあつち。あつちの目も物。あつちの目も物

神の尻とあつち。あつちの目も物。あつちの目も物

あつちの目も物。あつちの目も物。あつちの目も物























































があてをふりまうせむと合らうとんへの田向へ持参さるれ  
 りものも方下りあてあつらふ身の祈禱するらうと云  
 づらふ引く生根のついで思ふん大切の釈せあり  
 捨てる土地へ来て洗ふ活業ヲ貞女と第身あて發  
 のかごりの擗弁。たむか衣は若ふらるるをさうらるの長價を  
 後より價や一申がさうらるるをさうらるの長價を  
 つく客のさかんさるる上あ多人の迷ひ物もさうらるる  
 天上也モリくあそこのついで顔とるものもさくま

身やのいびきSTANWICKのSYNOPSIS  
 せんさびのいびきSTANWICKのSYNOPSIS  
 極めは今日は今また日よるまはるる







山  
谷  
大

付の依りゆるる事

橋列 何丹 示く

左馬 橋記 書

佐 何名 橋記 之 書

石川 至 合 朝 後 野 之

美 七 之 六



